

# 文化の変容研究を俯瞰する

## —変容の背景・方法論・個人主義化—

荻原 祐二 (青山学院大学 教育人間科学部, yogihara@ephs.aoyama.ac.jp)

A brief overview of cultural change research:

Background of cultural changes, methodology, and the increase in individualism

Yuji Ogihara (College of Education, Psychology and Human Studies, Aoyama Gakuin University, Japan)

### Abstract

This article briefly overviews research on cultural change. This article consists of three sections. The first section explains the background of cultural changes. Various substantial changes, including modernization and globalization, have occurred. Due to these changes, cultures that have been historically and traditionally inherited are gradually changing. The second section overviews the methodology of research on cultural change. It is not easy to empirically examine cultural changes. I introduce three major approaches to overcome these difficulties: analyzing archival data, conducting cross-temporal meta-analyses, and analyzing cultural products. Finally, the third section outlines studies on changes in individualism as an example of cultural change. It has been shown that various cultures, including Japanese culture, have become more individualistic. In contrast, it has also been reported that, in some respects, cultures have not become more individualistic. Therefore, it is necessary to clarify the moderating factors and boundary conditions of this discrepancy.

### Key words

cultural change, archival data, cross-temporal meta-analysis, cultural product, individualism

### 1. はじめに

本稿では、文化<sup>(1)</sup>の変容<sup>(2)</sup>に関して、その変容の背景と方法論について概観し、心理学における<sup>(3)</sup>代表的な研究領域のひとつである、個人主義化に関する実証的知見を簡潔にレビューする。個々のトピックについて詳細に総論するというよりも、各トピックの概要を説明し、その全体像を俯瞰することを目的とする。

文化の変容を検討することには、様々な意義がある(詳細は、Ogihara, 2017を参照; 関連する議論として例えば、Kashima et al., 2019; Muthukrishna et al., 2021; Varnum & Grossmann, 2017)。まず、文化がどのように変化しているのかを定量化・数値化して可視化し<sup>(4)</sup>、記述・説明することは、現象に関する情報を付加し、理解を促進する。こうした文化変容の基礎的な記述や説明は、人の心と文化がどのように影響を及ぼし合っているのかや、文化はどのように構築・維持・伝達されていくのかといったメカニズムやプロセスの解明につながり、人の心や行動、そして文化を理解するための基礎的な情報ともなる。また、文化がこれまでどのように変わってきたのかを定量化・数値化して可視化し、記述・説明することによって、今後文化がどのように変わっていくのかを予測し、共起しうる社会問題の解決・予防といった実践的・社会的な対応・対策も可能となる。さらに、心理や行動、文化が社会・経済・生態環境などの様々な要因とどのように関連しているのかについて、個人や地域ではなく、時間(e.g., 年・月)を単位とした分析を行うこともできる。加えて、

研究結果の解釈や考察に貢献することで、再現性や追試可能性の検証にも役立つ(e.g., 文化変容が、結果が再現できない理由のひとつかもしれない)。

以下の内容は、3章から構成されている。2章では、文化の変容の背景について説明する。3章では、文化の変容を検討する方法論について概観する。最後に4章では、文化変容の一例として、個人主義化を取り上げて具体的な知見を概説する。

### 2. 文化の変容の背景

文化の変容の背景について議論する際に、2つの概念が用いられることが多い。それが近代化とグローバル化である。

#### 2.1 近代化

人間は、太古の厳しい自然環境において、集団を作り相互に助け合うことで、効率的に食料を確保・維持し、外界の脅威から身を守り、生存・生殖の可能性を高めてきた。社会の近代化が進み、人間を取り囲む環境は大きく変化した。自給自足から交換経済に転換し、物質的豊かさが高まった。科学技術が著しく進展し、人々の生活はより便利になった。人や物、金、情報などの流動性が高まり、都市化も進んだ。また、公共教育制度が発展し、情報の共有・継承がより大規模かつ効率的に行われるようになった。こうした様々な変化を伴う近代化と共に、文化は変容してきた(例えば、近代化理論; 詳細は後述する; e.g., Inglehart & Baker, 2000; Inglehart et al., 2008)。

#### 2.2 グローバル化

国家間貿易の制限の自由化、技術革新に伴う交通・移

動手段の多様化・高速化・低コスト化、情報・通信技術の発展などによって、グローバル化が進んだ。人・物・金・情報の国境を越えた移動は増加し、人々はよりグローバルな環境に囲まれるようになっていく。グローバル化は、「貿易や移住、情報や思想の交換により、文化が相互に影響を与え、より類似したものになる過程 (Arnett, 2002: 774)」などと定義されるように、文化の変容が想定されている。政治・経済・社会はグローバル化の影響を強く受けており、文化も例外ではない。国家という制限・境界を超え、文化レベルでの相互作用を容易にし、文化の変容にも大きな影響を与えていると考えられる (e.g., Arnett, 2002; Chiu et al., 2011)。

### 2.3 まとめ

この近代化とグローバル化という概念が、文化の変容について議論する際にしばしば用いられる。一方で、それぞれの概念に含まれる要素が多いため、曖昧に使用されることも多い。例えば、近代化というよりも、科学技術の進展であったり、グローバル化というよりも、流動性の高まりといった概念を用いた説明の方が適切であることも多い。また、学術用語としてだけでなく、広く一般的に使用される用語でもあるがゆえに、定義や意図している意味が、使用者によって大きく異なっていることもある。

近代化とグローバル化を含めて、様々な変化が生じている中で、歴史的・伝統的に受け継がれてきた文化も徐々に変容している。もちろん、文化のすべての側面や領域が変化しているとは言い切れない。文化には変わらず維持されている側面もあるが、変化している側面も多い。例えば、50年前の日本文化と、現在の日本文化が同一のものとして断言することは難しいであろう。

こうした文化の変容が世間ではしばしば語られるが、そのエビデンスが提示されていないことも多い。そうした主張や言説が正しいかどうか、そうした変化が本当に生じているのかどうかを明らかにすることがまずは必要である。そのためには、文化がどのように変化しているかを定量化・数値化して視覚化し、記述・説明することが必要不可欠である。

## 3. 文化の変容を検討する方法

文化の変容を実証的に検討するためには、ある一定期間の経時的なデータが必須である。そのために、現在から過去に戻って調査や実験を新たに行い、その変化を検証することはできない。また、現時点から文化の変容を観測し始めて仮説を検証することは、その長期的なコストを考えなければいけない。それゆえに、文化の変容を実証的に扱うことは容易ではない。

ここでは、そうした困難を克服して文化の変容を検討するために多く用いられている3つの方法（アーカイブデータの分析・時間横断的メタ分析・文化的産物の分析）を概説する。

### 3.1 アーカイブデータの分析

文化の変容を検討するためには、研究機関や政府機関などによって継続的に収集され、長期間蓄積されてきたアーカイブデータの分析が有効である。適切に設計・収集されたアーカイブデータは、測定の妥当性や信頼性を確認した上で、同質性を担保した計測を長期的に行っている。ある一定以上の条件を満たしたデータの収集が継続的に行われ、それがアクセス可能な形式で蓄積されていけば、文化変容を検討するために利用することができる。例えば、国勢調査や人口動態調査、日本人の国民性調査、世界価値観調査 (World Values Survey) などが挙げられる。

しかし、検証したい変容において、長期間にわたってこれらの条件を満たしたデータが蓄積され続けていることは実際には多くない。そもそも検証したい変容が対象とされていないか、たとえ対象とされていても、長期的に検証され続けている変容は限定的である。特に、経済指標や人口指標などの比較的ハードな指標は蓄積が豊富であるが、心理指標・行動指標などの比較的ソフトな指標は、検証の対象となっていないことが多く、対象となっても単発的な調査に留まっていて、長期的な検証としては利用可能な状態にないことが多い。さらに、調査形式や文言の変更などにより、データや項目の同質性が失われてしまっていることも多い (e.g., 荻原, 2022)。<sup>5)</sup>

このように、検証に適切なデータが蓄積され続けていることは現実的には少ないため、欠点のない完璧な検討は難しい。そのデータの利点と限界点を明確にして、どの程度の妥当性や信頼性、一般化可能性があるのかといったことを確認しながら、エビデンスを積み重ねることが重要と言える。

### 3.2 時間横断的メタ分析

アーカイブデータの分析と並んで、文化の変容を検討する方法として、時間横断的メタ分析も有用である。時間横断的メタ分析とは、過去の研究で報告された特定の変数や概念の平均値などの統計量を、そのデータが収集された時期ごとに統合して分析することで、時間的変化を検討するメタ分析のひとつである (レビューとして、岡田, 2018; Rudolph et al., 2020; Twenge, 2011)。メタ分析の中でも、時間という要素に重点を置いた分析と言える。

過去の研究論文をアーカイブデータとみなすならば、時間横断的メタ分析は、アーカイブデータの分析の一形態とも言える。例えば、自尊心 (e.g., Twenge & Campbell, 2001) や外向性 (e.g., Twenge, 2001)、孤独感 (e.g., Buecker et al., 2021)、記憶課題の成績 (e.g., Wongupparaj et al., 2017) など、様々な変数や概念を対象に時間横断的メタ分析が行われてきた。妥当性と信頼性が相対的に高いレベルで保証されていることが多い過去の研究の情報を対象に分析を行えるため、新たに得られる情報の妥当性や信頼性も相対的に高いレベルを期待でき得る。

しかし、時間横断的メタ分析においても、アーカイブ

データの分析と同様の問題がある。例えば、検証したい変数や概念を対象とした研究が行われていなかったり、行われていたとしても、経時的变化を分析するにはその研究数（サンプルサイズ）や対象期間が十分でないことも多い。また、尺度項目の変更や追加により、データや項目の同質性が失われてしまうこともしばしば生じる。さらに、性別や年齢集団ごとの平均値や相関係数、サンプルサイズなどの、分析に必要な統計量が論文中に報告されていないために、分析対象に含めることが難しいこともある。

### 3.3 文化的産物の分析

こうした限界点を克服可能な方法のひとつとして、文化的産物の分析が挙げられる。文化的産物は、「広告や教科書など、有形で共有された文化表象 (Morling & Lamoreaux, 2008: 199)」などと定義される。文化的産物は、人間の心理・行動傾向が、人間の外側に反映されている。それゆえに、時間を超えて残存しうるため、文化変容の検証に適している。実際に、これまで書籍や新聞、広告、歌詞など、様々な文化的産物を用いて文化変容が検証されてきた (レビューとして、Morling, 2016; 同様の議論として、Baumard et al., 2024)。

一方で、自然災害や戦争、検閲などによって、文化的産物の種類や量などに選別・バイアスが生じる可能性があることも考慮しなければいけない。文化的産物の種類や量に変化が見られても、想定している心理・行動傾向とは別の理由により生じた変化である可能性も検討する必要がある。また、想定する心理・行動傾向が、文化的産物に本当に反映されているのかという妥当性の問題もある。文化的産物とは別の測度との関連や、想定される概念との関連を新たに検証することが求められる場合もある。

### 3.4 まとめ

文化の変容を検討するために多く用いられている3つの方法（アーカイブデータの分析・時間横断的メタ分析・文化的産物の分析）を概説した。

それぞれの方法には長所と短所がある。よって、状況や目的に応じた使い分けが求められる。例えば、適切なアーカイブデータに幸いにもアクセス可能な場合にはそれを分析できるが、適切なアーカイブデータにアクセスできない場合には文化的産物を分析することが考えられる。逆に、文化的産物にはサンプリングのバイアスが強く懸念される場合には、時間横断的メタ分析を行うといった対応も可能である。また、時間横断的メタ分析では対象となる期間が短くなってしまふ場合には、アーカイブデータを合わせて検討するといった対応も考えられる。

また、単独の方法だけでは限界がある場合もあり、より頑健で説得力のある検討を行うためには、複数の方法を複合的に用いて検証することが望ましいと言える。これらの方法を実際に用いた研究の具体例を以下で概説する。

## 4. 文化の個人主義化

このような方法を用いて、文化変容研究は蓄積されてきた。文化変容には様々な次元・種類があるが、比較文化研究において最も検討されてきた、個人主義に関する研究の蓄積が進んでいる (e.g., Ogihara, 2018a; Varnum & Grossmann, 2017)。個人主義には様々な定義があるが、例えば、「自己を集団から独立した存在とみなし、緩やかに結びついた個人によって構成される社会のパターン」(Triandis, 1995: 2)と定義される。個人主義的環境において、人間は他者から独立した存在であるという認識を持ちやすく、他者と異なる自己の個性や独自性を追求する傾向が強く、個人的な目標や達成を重視しやすいといったことが示されている (レビューとして例えば、Oyserman et al., 2002; Taras et al., 2014; Triandis, 1995; Vignoles et al., 2016)。例えば、先に述べた近代化により、個人の生存可能性は過去に比べて相対的に上昇し、人々は資源の獲得や外界の脅威からの防衛において、集団に依存しなければいけない程度が相対的に低下した。その結果、集団内における行動の選択可能性・自由度は増加し、個人主義化が進んだと考えられている (近代化理論; e.g., Inglehart & Baker, 2000; Inglehart et al., 2008)。

### 4.1 様々な文化の個人主義化

近代化理論が予測する通り、実際にアメリカにおいて様々な側面で個人主義化が進んでいることが報告されている (レビューとして、Ogihara, 2018a; Twenge, 2015)。例えば、1960年から2008年にアメリカで出版された書籍における代名詞の出現頻度の変化を分析し、一人称単数代名詞 (e.g., I, me) や二人称単数代名詞 (e.g., you, yours) は増加し、一人称複数代名詞 (e.g., we, us) は低下していることから、アメリカ文化の個人主義化が示されている (Twenge et al., 2013)。本研究は、文化的産物のひとつである書籍を用いることで、文化の変容を記述していると言える。

こうした個人主義化は、アメリカだけでなく、イギリスやフランス、ドイツなど、多くの先進国でも広く報告されている (e.g., Greenfield, 2013; Yu et al., 2016)。さらに、発展が著しい中国やインド、ブラジルなどにおいても共通して見られる現象であることが示されている (e.g., Bao et al., 2021; Ogihara, 2023; Santos et al., 2017)。中国やインド、ブラジルなどの、歴史的・伝統的に個人主義的な国とは言えない地域でも、個人主義化が進んでいる。

### 4.2 日本文化の個人主義化

他国と同様に、日本でも個人主義化が進んでいることが示されている (レビューとして、Ogihara, 2017)。例えば、Ogihara (2018b) は、家族構造に関するアーカイブデータを分析し、1947年から2015年において、離婚率や単独世帯の割合が増加したり、家族サイズが減少していることを示し、人々が家族集団から独立して生活する傾向が高まり、日本文化が個人主義化していることを報告している。また、1980年代から2000年代に行われた価値観調

査の時間横断的メタ分析を行った所、日本でも個人主義傾向が増加していた (Taras et al., 2012)。さらに、Ogihara and Ito (2022) は、文化的産物のひとつである新生児の名前 (レビューとして、荻原, 2023; Ogihara, 2025) を分析することで、1979年から2018年において、新生児に個性的な名前を与える傾向が高まっていることを示し、日本文化の個人主義化を報告している。個性的な名前の増加は、異なるサンプル (標本) や分析方法を用いても一貫して確認されている (Ogihara et al., 2015; Ogihara, 2021; 2022)。

一方で、個人主義化が進んでいないと考えられる側面についての報告もある (Hamamura, 2012)。例えば、社会的調和や国家・社会の重要性といった、個人レベルの自己報告指標に基づく社会的価値観の一部においては、個人主義化が見られないと解釈されている。また、個人レベルでは個人主義傾向と正の相関関係を示す自尊心 (e.g., Chung & Mallery, 1999; Heine et al., 1999) が、経時的に低下していることが報告されている (Ogihara, 2016; 荻原, 2018; Ogihara et al., 2016; 小塩他, 2014)。

これらの知見は、文化のすべての側面や領域において、変容が均一に進んでいる訳ではないことを示している。文化の変容が進みやすい側面や領域もあれば、進みにくい側面や領域もあると考えられる。実際に、新生児への名づけにおいて、男児にも女児にも個性的な名前を与える傾向は高まっているが、その変化は女児においてより顕著であることが繰り返し示されている (Ogihara, 2021; Ogihara & Ito, 2022)。

### 4.3 まとめ

3章で説明した文化の変容を検討する方法を実際に用いて行われた、文化の個人主義化に関する知見を概観した。今後も、こうした文化の変容の違いを説明する調整要因や境界条件を明らかにすることが求められる。そのためには、文化の変容を定量化・数値化して視覚化し、記述・説明する研究を蓄積して、その分析や比較を行うことが必要不可欠である。また、そうした不均一な文化変容が、人々の心理や行動に影響を与える可能性が指摘されている (e.g., Ogihara et al., 2016; Ogihara & Uchida, 2014)。しかし、十分な検討が未だ行われていないため、この影響についても解明する必要がある。

### 注

<sup>(1)</sup> 本稿では、文化を、「集団において、歴史を通じて築かれ、共有され、継承されてきた、規範や規則、制度、慣習、価値観、生活様式などの総体、およびそれらによって生み出されるもの」と定義して用いる。文化の定義は様々になされてきた (e.g., Cohen, 2009; 石黒・亀田, 2010; 石川他, 1994)。例えば、「歴史的に取捨選択され、累積してきた慣習、概念、イメージ、通念、それらの体制化された構造、さらには、それらに基づいて作られた人工物の総体 (北山, 1994: 155)」や「社会の歴史を通じて築かれ、蓄えられてきた慣習や公の意

味構造」(北山, 1998: 6)、「特定の社会の人々によって習得され、共有され、伝達される行動様式ないし生活様式の体系 (石川他, 1994: 666)」などがある。これらの定義を参考に、文化の定義に含めるべきと考えられる以下の4つの要素をすべて含むものとして整理した。①個人の集合である集団において、②作り出され、共有されており、③歴史を通じて伝達・継承されている、④規範や慣習、生活様式など様々な要素から構成されているもの。

<sup>(2)</sup> 本稿では、文化変容の期間の長さ (タイムスパン) について特に限定せず議論する。本稿が、「文化進化 (cultural evolution)」という言葉を用いているのであれば、対象とする期間を具体的に決めて明示することが必要になると考えられる。「文化進化」の文脈では、「進化」の定義や考え方によって、対象とする期間が研究や研究者の間で大きく異なっている。そのため、その想定される期間によって予測されるメカニズムや設定される仮説も異なってくる。一方で、本稿は「文化変容」というフレームで議論をしており、この言葉から対象期間が限定されることは考えられない。文化が変化していることに関する現象を取り扱っているのだから、その期間によって、文化変容かそうでないかが規定される訳ではない。

<sup>(3)</sup> 文化の変容は、心理学だけでなく、社会学や歴史学、人類学など多くの学術領域で検討されている。例えば、社会学や人類学では acculturation という概念を用いて文化の変容が検討されてきた。学術領域を明確に区分することは困難であるが、本稿では、主に心理学の観点から実証的に検討した研究を中心に取り上げて議論する。

<sup>(4)</sup> 本稿では、文化の変容を定量化・数値化することによって可視化・視覚化して検証・議論するアプローチについて主に概観している。定量化・数値化ではなく、面接 (インタビュー) やフィールドワーク、ケーススタディなどの定性的・質的なアプローチから文化の変容を検討・議論することも有用であり、重要である。

<sup>(5)</sup> こうした問題点・限界点が生じないためにも、心理指標・行動指標などを対象とした調査の適切な設計・実施・分析に習熟した心理学の専門家が、調査に関与していることが望ましいと考えられる。

### 引用文献

- Arnett, J. J. (2002). The psychology of globalization. *American Psychologist*, 57 (10), pp. 774-783.
- Bao, H. W. S., Cai, H., Jing, Y., & Wang, J. (2021). Novel evidence for the increasing prevalence of unique names in China: A reply to Ogihara. *Frontiers in Psychology*, 12, 731244.
- Baumard, N., Safra, L., Martins, M., & Chevallier, C. (2024). Cognitive fossils: Using cultural artifacts to reconstruct psychological changes throughout history. *Trends in Cognitive Sciences*, 28 (2), pp. 172-186.
- Buecker, S., Mund, M., Chwastek, S., Sostmann, M., & Luh-

- mann, M. (2021). Is loneliness in emerging adults increasing over time? A preregistered cross-temporal meta-analysis and systematic review. *Psychological Bulletin*, 147 (8), pp. 787-805.
- Chiu, C. Y., Gries, P., Torelli, C. J., & Cheng, S. Y. (2011). Toward a social psychology of globalization. *Journal of Social Issues*, 67, pp. 663-676.
- Chung, T., & Mallery, P. (1999). Social comparison, individualism-collectivism, and self-esteem in China and the United States. *Current Psychology*, 18, pp. 340-352.
- Cohen, A. B. (2009). Many forms of culture. *American Psychologist*, 64, pp. 194-204.
- Greenfield, P. M. (2013). The changing psychology of culture from 1800 through 2000. *Psychological Science*, 24 (9), pp. 1722-1731.
- Hamamura, T. (2012). Are cultures becoming individualistic?: A cross-temporal comparison of individualism-collectivism in the United States and Japan. *Personality and Social Psychology Review*, 16, pp. 3-24.
- Heine, S. J., Lehman, D. R., Markus, H. R., & Kitayama, S. (1999). Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review*, 106 (4), pp. 766-794.
- Inglehart, R. & Baker, W. E. (2000). Modernization, cultural change, and the persistence of traditional values. *American Sociological Review*, 65, pp. 19-51.
- Inglehart, R., Foa, R., Peterson, C., & Welzel, C. (2008). Development, freedom, and rising happiness: A global perspective (1981-2007). *Perspectives on Psychological Science*, 3 (4), pp. 264-285.
- 石黒広昭・亀田達也 (2010). 文化と実践—心の本質的社会性を問う—. 新曜社.
- 石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男 (1994). 文化人類学事典 縮刷版. 弘文堂.
- Kashima, Y., Bain, P. G., & Perfors, A. (2019). The psychology of cultural dynamics: What is it, what do we know, and what is yet to be known? *Annual Review of Psychology*, 70 (1), pp. 499-529.
- 北山忍 (1994). 文化的自己観と心理的プロセス. 社会心理学研究, 10, pp. 153-167.
- 北山忍 (1998). 自己と感情—文化心理学による問いかけ—. 共立出版.
- Morling, B. (2016). Cultural difference, inside and out. *Social and Personality Psychology Compass*, 10 (12), pp. 693-706.
- Morling, B. & Lamoreaux, M. (2008). Measuring culture outside the head: A meta-analysis of individualism-collectivism in cultural products. *Personality and Social Psychology Review*, 12, pp. 199-221.
- Muthukrishna, M., Henrich, J., & Slingerland, E. (2021). Psychology as a historical science. *Annual Review of Psychology*, 72 (1), pp. 717-749.
- Ogihara, Y. (2016). The change in self-esteem among middle school students in Japan, 1989-2002. *Psychology*, 7 (11), pp. 1343-1351.
- Ogihara, Y. (2017). Temporal changes in individualism and their ramification in Japan: Rising individualism and conflicts with persisting collectivism. *Frontiers in Psychology*, 8, 695.
- 荻原祐二 (2018). 日本における自尊心の発達の变化—中学生から高齢者における自己好意の年齢差の検討—. 対人社会心理学研究, 18, pp. 133-143.
- Ogihara, Y. (2018a). Economic shifts and cultural changes in individualism: A cross-temporal perspective. In A. Uskul & S. Oishi (Eds.), *Socioeconomic environment and human psychology: Social, ecological, and cultural perspectives* (pp. 247-270). Oxford: Oxford University Press.
- Ogihara, Y. (2018b). The rise in individualism in Japan: Temporal changes in family structure, 1947-2015. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 49 (8), pp. 1219-1226.
- Ogihara, Y. (2021). Direct evidence of the increase in unique names in Japan: The rise of individualism. *Current Research in Behavioral Sciences*, 2, 100056.
- Ogihara, Y. (2022). Common names decreased in Japan: Further evidence of an increase in individualism. *Experimental Results*, 3, e5.
- 荻原祐二 (2022). 「たまひよ赤ちゃんの名前ランキング」における調査方法の変化. 科学・技術研究, 11 (1), pp. 43-46.
- Ogihara, Y. (2023). Chinese culture became more individualistic: Evidence from family structure, 1953-2017. *F1000Research*, 12, 10.
- 荻原祐二 (2023). 人名の読み方とその不確定性—実証研究の概観—. 日本語学, 42 (2), pp. 142-155.
- Ogihara, Y. (2025). Uncommon names are increasing globally: A review of empirical evidence on naming trends. Submitted for publication.
- Ogihara, Y. & Ito, A. (2022). Unique names increased in Japan over 40 years: Baby names published in municipality newsletters show a rise in individualism, 1979-2018. *Current Research in Ecological and Social Psychology*, 3, 100046.
- Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common?: The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, 6, 1490.
- Ogihara, Y. & Uchida, Y. (2014). Does individualism bring happiness?: Negative effects of individualism on interpersonal relationships and happiness. *Frontiers in Psychology*, 5, 135.
- Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. (2014). How do Japanese perceive individualism?: Examination of the meaning of individualism in Japan. *Psychologia*, 57 (3), pp. 213-223.
- Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. (2016). Losing confidence over time: Temporal changes in self-esteem among older children and early adolescents in Japan, 1999-2006. *SAGE Open*, 6 (3), pp. 1-8.
- 岡田涼 (2018). 時代的な変化を探る—自尊感情の変化に関する時間横断的メタ分析—. 岡田涼・小野寺孝義 (編)

- 実践的メタ分析入門—戦略的・包括的理解のために—。ナカニシヤ出版, 京都, pp. 133-145.
- 小塩真司・岡田涼・茂垣まどか・並川努・脇田貴文 (2014). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響—Rosenbergの自尊感情尺度日本語版のメタ分析—. 教育心理学研究, 62 (4), pp. 273-282.
- Oyserman, D., Coon, H. M., & Kemmelmeier, M. (2002). Rethinking individualism and collectivism: Evaluation of theoretical assumptions and meta-analyses. *Psychological Bulletin*, 128, pp. 3-72.
- Rudolph, C. W., Costanza, D. P., Wright, C., & Zacher, H. (2020). Cross-temporal meta-analysis: A conceptual and empirical critique. *Journal of Business and Psychology*, 35, pp. 733-750.
- Santos, H. C., Varnum, M. E., & Grossmann, I. (2017). Global increases in individualism. *Psychological Science*, 28 (9), pp. 1228-1239.
- Taras, V., Sarala, R., Muchinsky, P., Kemmelmeier, M., Singelis, T. M., Avsec, A., Coon, H. M., Dinnel, D. L., Gardner, W., Grace, S., Hardin, E. E., Hsu, S., Johnson, J., Aygün, Z. K., Kashima, E. S., Kolstad, A., Milfont, T. L., Oetzel, J., Okazaki, S., Probst, T. M., Sato, T., Shafiro, M., Schwartz, S. J., and Sinclair, H. C. (2014). Opposite ends of the same stick? Multi-method test of the dimensionality of individualism and collectivism. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 45, pp. 213-245.
- Taras, V., Steel, P., & Kirkman, B. L. (2012). Improving national cultural indices using a longitudinal meta-analysis of Hofstede's dimensions. *Journal of World Business*, 47 (3), pp. 329-341.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press.
- Twenge, J. M. (2001). Birth cohort changes in extraversion: A cross-temporal meta-analysis, 1966-1993. *Personality and Individual Differences*, 30 (5), pp. 735-748.
- Twenge, J. M. (2011). The duality of individualism: Attitudes toward women, generation me, and the method of cross-temporal meta-analysis. *Psychology of Women Quarterly*, 35 (1), pp. 193-196.
- Twenge, J. M. (2015). The age in which we live and its impact on the person. In K. J. Reynolds & N. R. Branscombe (Eds.), *Psychology of change: Life contexts, experiences, and identities* (pp. 44-58). New York, NY: Psychology Press.
- Twenge, J. M. & Campbell, W. K. (2001). Age and birth cohort differences in self-esteem: A cross-temporal meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review*, 5 (4), pp. 321-344.
- Twenge, J. M., Campbell, W. K., & Gentile, B. (2013). Changes in pronoun use in American books and the rise of individualism, 1960-2008. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 44 (3), pp. 406-415.
- Varnum, M. E. & Grossmann, I. (2017). Cultural change: The how and the why. *Perspectives on Psychological Science*, 12 (6), pp. 956-972.
- Vignoles, V. L., Owe, E., Becker, M., Smith, P. B., Easterbrook, M. J., Brown, R., González, R., Didier, N., Carrasco, D., Cadena, M. P., Lay, S., Schwartz, S. J., Des Rosiers, S. E., Villamar, J. A., Gavreliuc, A., Zinkeng, M., Kreuzbauer, R., Baguma, P., Martin, M., Tatarko, A., Herman, G., de Sauvage, I., Courtois, M., Garðarsdóttir, R. B., Harb, C., Schweiger Gallo, I., Prieto Gil, P., Lorente Clemares, R., Campara, G., Nizharadze, G., Macapagal, M. E. J., Jalal, B., Bourguignon, D., Zhang, J., Lv, S., Chybicka, A., Yuki, M., Zhang, X., Espinosa, A., Valk, A., Abuhamedh, S., Amponsah, B., Özgen, E., Güner, E. Ü., Yamakoğlu, N., Chobthamkit, P., Pyszczynski, T., Kesebir, P., Vargas Trujillo, E., Balanta, P., Cendales Ayala, B., Koller, S. H., Jaafar, J. L., Gausel, N., Fischer, R., Milfont, T. L., Kusdil, E., Çağlar, S., Aldhafri, S., Ferreira, M. C., Mekonnen, K. H., Wang, Q., Fülöp, M., Torres, A., Camino, L., Lemos, F. C. S., Fritsche, I., Möller, B., Regalia, C., Manzi, C., Brambilla, M., & Bond, M. H. (2016). Beyond the 'east-west' dichotomy: Global variation in cultural models of selfhood. *Journal of Experimental Psychology: General*, 145, pp. 966-1000.
- Wongupparaj, P., Wongupparaj, R., Kumari, V., & Morris, R. G. (2017). The Flynn effect for verbal and visuospatial short-term and working memory: A cross-temporal meta-analysis. *Intelligence*, 64, pp. 71-80.
- Yu, F., Peng, T., Peng, K., Tang, S., Chen, C. S., Qian, X., Sun, P., Han, T., & Chai, F. (2016). Cultural value shifting in pronoun use. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 47 (2), pp. 310-316.

受稿日：2025年2月2日

受理日：2025年4月12日

発行日：2025年6月30日

Copyright © 2025 Society for Human Environmental Studies



This article is licensed under a Creative Commons [Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International] license.



<https://doi.org/10.4189/shes.23.53>